

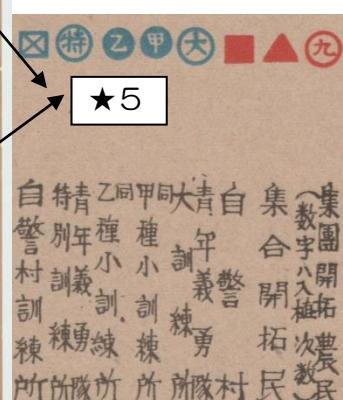
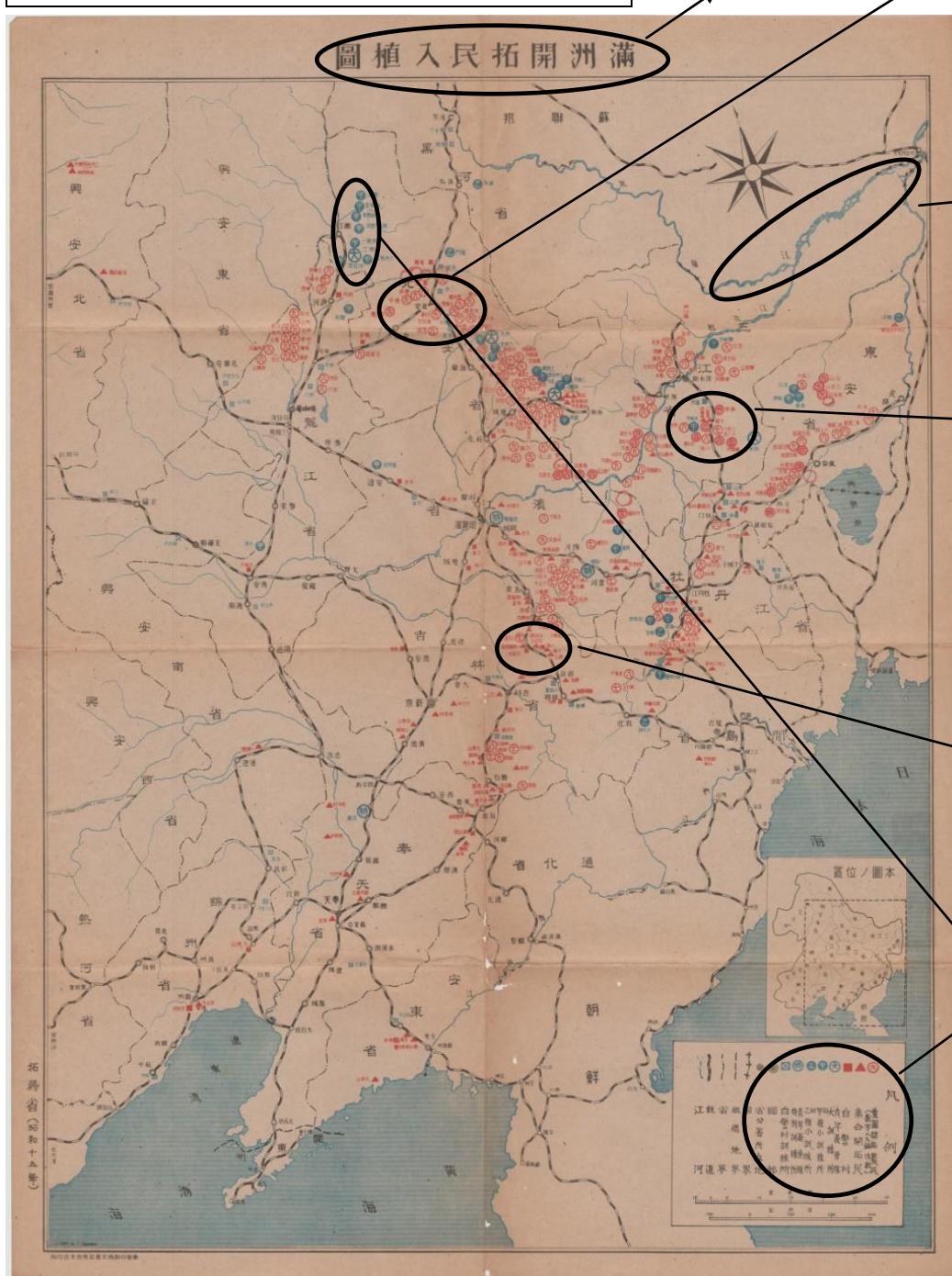
## 授業で使える当館所蔵地図

No.34 『満洲開拓民入植圖』

作成年：1940（昭和15）年

サイズ：70×52cm

作者：拓務省 東亜印刷株式会社東京支店



**【本図の解説】** 本図は、拓務省が作成したもので、満洲開拓団の位置と入植年次がわかる地図である。本図に示された赤丸の「一」から「九」の数字は、1933(昭和8)年～1940(昭和15)年までに入植した集団開拓団の入植次数を表している。他にも1939(昭和14)年からはじまる集合移民、1935(昭和10)年からはじまる自警村、さらには各種訓練所の位置もわかる。当館には本図の他に1938(昭和13)年に拓務省拓務局が発行した『満洲農業移民入植圖』があり、1938(昭和13)年の第7次集団移民までの開拓団の場所が表示されている。

### ★1 満洲開拓民とは

1932(昭和7)年に建国された満洲国に移住した人たちの事。満洲国を日本の強い影響下で維持したいと考えている関東軍と移民推進論者(加藤完治ら)は、満洲を安定支配し、対ソ連防衛を行うためには大量の農民の入植が必要であると考えていた。ただし大蔵大臣高橋是清は投資した分の見返りが期待できないとして大規模な予算化はされなかった。このため 1932(昭和 7)年～1936(昭和 11)年の間は細々と試験移民が行われた。1936(昭和 11)年に二・二六事件で高橋是清が死去すると広田弘毅内閣の下で予算化され、1937(昭和 12)年～1941(昭和 16)年の満洲農業移民一〇〇万戸移住計画第一期を迎える。1942(昭和 17)年からは第二期に入つたが、国内の移民希望者数が伸び悩み、計画通りにはいかなかった。この地図では試験移民期と一〇〇万戸移住計画第一期の開拓団の数と配置を確認することができる。

### ★2 満洲とソ連との国境

満洲とソ連との国境は黒竜江(アムール川)である。1945(昭和 20)年 8 月 9 日にソ連軍が国境を越えて侵攻してきたことで北部の開拓団の多くに略奪(時に暴行)など多大な被害が出た。

### ★3 試験移民期の開拓団

地図中の①弥栄 ③千振 は試験移民期の重要な開拓拠点である。試験移民期は匪賊(反日闘争を行う勢力を一般にそう呼んだ)による襲撃が頻発し、在郷軍人(軍役経験者)のみで結成された開拓団にも多くの犠牲が出た。特に 1934(昭和 9)年の土龍山事件の影響が大きく、退団者が相次ぎ、一時は移民事業の継続も危ぶまれた。なんとか匪賊を鎮圧したことでの一〇〇万戸移住計画第一期では一般農民に門戸が開かれた。ただし、治安が安定しているのは鉄道沿線のみであったので、第5次、第6次あたりまでは鉄道に近い所にしか開拓団を配置できなかった。

### ★4 集合開拓団

地図中の赤い▲には郡上村開拓団がある。これには赤丸の数字がついていない。郡上村は 1939(昭和 14)年に入植したが、他の開拓団のように集団移民ではなく集合移民という形態を採用している。集合移民は 30 戸～200 戸の小規模開拓団、集団移民は 200 戸～300 戸と規模によって分類されていたため 181 戸の郡上村は集合扱いとなった。しかし、一〇〇万戸移住計画第一期に入っても 200 戸に満たないものがほとんどで、逆に 181 戸の郡上村は集合と名乗りつつ最大規模の開拓団となってしまった。

### ★5 青年義勇隊

地図中の青丸表示は青年義勇隊と呼ばれる武装開拓団である。一〇〇万戸移住計画第一期の頃から日本は日中戦争が始まり、軍需を中心に労働者が不足するようになっていた。このため、集団開拓団の欠員が増え、入植を促進したい関東軍は 1938(昭和 13)年から 14 歳から 18 歳までの少年を早期教育によって満洲の農民兼兵士として育成しようと考えた。国内の労働力不足が激しくなるにつれ青年義勇隊の募集は増え、中学教員による強引な勧誘も多く見られた。また、この青年義勇隊はソ連との国境近くに配置される事が多かったため、ソ連参戦時の被害も大きかった。満洲移民の目的が農村の経済更正ではなく、対ソ防衛による満洲支配であることが明らかになる事例である。

### ★6 北安省克山

この地図には表示されていないが、北安省克山には 1944(昭和 19)年に分村集団 13 次移民で郡上郡(現郡上市)から 6 団(総称して郡上郷と呼ぶ)が入植している。全国的に団員が集まらず開拓団が結成しにくい時期の入植であるため、郡上郡に何らかの送出圧力があったと考えられる。記録を見ると、「満洲開拓第二次送出五六年計画の一環として郡上郡が開拓特別指導郡に指定せられ関係当局の指導と盛り上る郡民の自覚とに依って・・・」と國もしくは県からの圧力をほのめかしている。後に紹介する郡上市遺族会『戦争体験の記録』内の野田かつ子「満洲開拓悲話」で紹介されているのは郡上郷の中の瑞穂開拓団である。

【活用の例】

○高校の日本史ABの授業において、満洲移民の目的や推移について地図を使って学ぶことができる。

地図上の赤丸の数字を数えることで試験移民期と本格移民期の移民規模の違いを明らかにすることができる。

	次数	入植年	地図上の開拓団数	入植者数(全国)	岐阜県民を含む開拓団名
試験移民期	第1次	1932(昭和7)年	1団	1557人	いやさかむら 弥栄村
	第2次	1933(昭和8)年	1団	1715人	該当なし
	第3次	1934(昭和9)年	1団	945人	みずほむら 瑞穂村
	第4次	1936(昭和11)年	2団	7707人	じょうしが 城子河
一〇〇万戸移住計画第一期	第5次	1937(昭和12)年	4団	7788人	ちょうとうそん 朝陽村
	第6次	1938(昭和13)年	17団		東海村
	第7次	1938(昭和13)年	19団	30196人	ちゅうとうせん 朝陽川
	第8次	1939(昭和14)年	38団	40423人	かとう 公心集読書
	第9次	1940(昭和15)年	58団	50889人	とくめい しきせいさかしたむら ほうおう ばれん がく たみ 德命 七星坂下村 凰凰 馬蓮河久田見
	第10次	1941(昭和16)年	地図なし	35774人	けいそう が やまとこう りゆうちうにき ま なごみ 鷄走河山県郷 柳毛溝恵那郷
第二期	第11次	1942(昭和17)年	地図なし	27149人	該当なし
	第12次	1943(昭和18)年	地図なし	25129人	ぶしきむら 武儀郷
	第13次	1944(昭和19)年	地図なし	23650人	せきすい 積翠 みずほ 瑞穂 ほすま 秀真 こうわ 興和 にしわら 西和良 東村
	なし	1945(昭和20)年	地図なし	13545人	

\*開拓民入植者数(全国)は参考数値

移民次数の数字が大きくなるにつれソ連国境に近づく傾向があること、青丸の義勇隊関係施設の場所はさらにソ連国境に近いことから、移民事業の目的が農村更正よりも満洲支配と対ソ防衛に重きを置いていた事が読み取れる。満洲移民に否定的であった高橋是清が1936(昭和11)年の二・二六事件で暗殺されたことにより、満洲移民政策の壁がなくなり、さらに農村の惨状に注目が集まり、満洲移民の農村経済更正という性格を強調することができた。二・二六事件が実際の政策に与えたわかりやすい例として取り上げることができる。

○中学校や小学校の社会科の授業において、郷土出身者の開拓村を抽出し、開拓団の概要を知ることができます。

例 岐阜県開拓自興会『岐阜県満洲開拓史』には県内送出の全開拓団の入植から引揚げまでの概要と、団員名簿(生死まで記録)があるため、最寄りの市町村ゆかりの開拓団について知ることができます。ただし、第11次以降の開拓団は地図上にないため『岐阜県満洲開拓史』付属の地図を参考にする必要がある。

○体験談などの文献との組み合わせでさらにそれぞれの開拓団の詳細、死亡率など詳細に学習することができます。

例 郡上市遺族会『戦争体験の記録』には野田かつ子さんの「満洲開拓悲話」が掲載されており、地図と団員名簿を傍らに読む事で、入植から逃避行の経路、誰がどこで亡くなったのかについておおまかに把握することができる。

引揚げルート 克山→哈爾浜(ハルビン)→新京→奉天→葫芦島(コロ一島)→佐世保

基本文献 岐阜県開拓自興会『岐阜県満洲開拓史』

参考資料(基礎知識) 小林英夫『〈満洲〉の歴史』

二松啓紀『移民たちの「満州」』

陳野守正『先生、忘れないで!「満蒙開拓青少年義勇軍」の子どもたち』

参考資料(授業用) 森田拳次『遙かなる紅い夕陽 満州からの引き揚げ』

郡上市遺族会『戦争体験の記録』

満蒙開拓平和記念館『満蒙開拓平和記念館』

授業をするにあたって参考になる場所 満蒙開拓平和記念館(長野県下伊那郡阿智村駒場)

郡上市たかす開拓記念館(岐阜県郡上市高鷲町大鷲)

\*ここでは「満洲」の「洲」の字を書名以外「洲」で統一して表示しています。